

# おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年  
**6月号**  
通巻598号  
毎月23日発行  
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年6月23日  
★発行所 大倭出版局  
〒631-0042 奈良市大倭町1の12  
☎(0742)45-1192  
★印刷 大倭印刷 監製  
★定価 1部 300円  
年間購読料3,500円(送料共)  
★郵便振替 01050-6-67002  
大倭出版局  
URL <http://www.ohyamoto.jp>



霊山山頂にて(福島県伊達市) 福島県南相馬市 高橋良美さん撮影(文・7頁)

**再録** 『すさのお』紙より

## 庶民の生活に深く根ざした土着信仰(全16回)

法主 矢追日聖

(十五)

昭和44(1969)年1月23日発行

『すさのお』第28号より

(法主、満56歳)

私はこれまで神憑りや霊能者、お代さんと自称する人達を沢山取り扱ってきた。そうした経験から、その人の教養、潜在意識、自己暗示が無意識のうちに強く働いて、神憑りの言葉や表情、動作に出るということを知った。

先祖霊や狐狸蛇等の霊があつてお代さんに働きかけたとしても、その出方はお代さんの程度によって千差万別であるということをよく知って欲しい。逆に私から観ていると、お代さんの程度に応じて分相応の霊体が働きかけるといふことも知っておいてもらいたいと思う。

「お大師さんが出てこられた」とか「天照大神のお告げなり」と言っているお代さんに働きかけている霊体は、大抵のところ狐狸霊等の気なのである。もともとお代さんになるような人は、えらい大神様に下がっていたらいいと願っているから、狸霊がいたずらをして働きかけてきたとしても、無意識に、時には意識的に自ら迎えて神が下がると信じるようになってしまう場合が多い。

取り巻く人達もこうしたことに深い認識がないから、崇めたてまつり大神様に仕立て上げてしまうという結果になる。

## 取り巻きがまつり上げる

名前を挙げるのは差し控えるが、こうした狸霊の働きで数十万という信者をもつ新興宗教もある。これなどになると、もうお代さんではなく近寄り難い教祖様々である。

もう十五年程前のことであるが、「私の守護霊は天照大神です」と言っていて来て来た女の人がいる。私は霊体の気の働きを波長のままでとらえるので、じつと調べてみると狸霊であった。その人が余りにも増上慢であったので気の毒に思い、「あなたのは狸霊ですよ」と言ったらカンカンになって怒って帰ってしまった。

この女の人などにも下手な取り巻が集まってしまったら、新興宗教にもなってしまう。お代さんだけではなしに、信者の側にも盲信的潜在意識や自己暗示がある。「おがみ屋」さんの稼業が成り立つのもこうした人達がいるからである。お代さんも取り巻く信者達も、狐狸蛇霊等の気が働くことによって、自分で自分を信じる結果になっていることに気が付いていない。

人は誰でも家内安全、息災延命をひたすらに願っている。天為、人為の災害から自分の家族の者達を守って欲しいというのは、人々のもつ本質的な弱さである。この弱さのために超人間的、神秘的な力にすがりたいという欲求が人々の心の底にある。自分の目に見えないものであっても自分達を助けてくれるものであれば神仏とするがらう。

こうした気持ちが無意識のうちに、時には意識的にお代さんの言う、「お大師様」「天照大神」を信じている例は、挙げだせばきりがないところである。私はいつもこうした人達を見るたびに、基礎的な認識をもって欲しいと思っている。そうで

ないと、普通ではとても信じられそうもないことをわけもなく信じてしまったりして、一生の不祥事を起こしかねないからである。

## 霊動は神経運動である

私のまわりにいると不思議と霊動を起こす人が多い。私はこれを、神秘的になるのを避けるため、よく神経運動とか自然反射運動とか呼んできたが、これは外から他の霊体の気の働きによって起こるのではなく、自己の最高潜在意識(本霊)が現在意識と余りに食い違っているため、何かの機会に突発的に起こるものなのである。

この自己発動、霊動にもその人の個性、教養、潜在意識、自己暗示が強く影響する。特にそれは霊動の初期の頃に著しい。この霊動においても、本人やこれを取り巻く人達の認識いかんによっては、とんでもないことになってしまうことがある。

ある宗教などでは、霊動を起こすと神に近づいたと信じ資格を高めたり、超人間的な教祖にまつり上げたりしてしまっている。そうなるとその人の枉罪<sup>まがとが</sup>まで言霊と信じてしまうことになる。霊動が起こってくると、人によってもちがうが、踊ったり歌ったり、予言めいたことなどを語り出す。

その時、本人や取り巻く人達に必要なことは、それを内容にとらわれず、こだわらずに受け取るということである。話している言葉の内容や形には何かの意味があつて教えているのであるが、それを事実と混同してとらわれてはいけなう。そうした内容や形の、本当の意味が自分で分かってくると、霊動はだんだん静かになり形も変わってくる。普通で一週間、長くて二ヶ月程で抜け切らなくてならない。それを抜け切った時、本当の意味での考えることができる。

「考える」ということは、大和言葉では「神に帰る」ということである。そうすると自分から求めなくても、必要な時に本心から自然にインスピレーションが湧き出てくる。最高潜在意識と現在意識とが一致するようになってきているからである。だからだといつまでも同じような霊動をやっている状態では、すかっとした靈感など湧いてこない。

こうした時、本人の気持ちの持ち方も大事であるが、取り巻く人達の態度も大切になってくる。

自己の最高潜在意識(本霊)が神であり仏である。私はよく動から静へと言うが、霊動は動から静への動きである。

本心と現在意識が一致するようになってくるところに、霊動の真の意味があることをよく知っておいて欲しい。「神ながらの法」は、本心と現在意識が一体になってこそ本当につかむことができる。

## (最終回)

昭和44(1969年)2月23日発行

## 『すさのお』第29号より

## (法主、満57歳)

私はこれまで十五回にわたって、庶民の生活に深く根ざした土着信仰を思い付くまま気の向くままに述べてきた。

庶民の中に残っている土着信仰は、生活の深部に食い込んでいるために、その信仰態度は甚だしく無意識的である。皮肉な言い方をすれば、無意識の信仰だから土着信仰なのだと言うこともできる。けれどもこの無意識の信仰態度は、時にはと

んでもない取り返しのかかぬ不祥事を起こしている。私は信仰を食いものにした事件をよく聞く。高知県で起こった「迷信を食いものにした祈祷師事件」(昭和四十二年十月四日朝日新聞)のように、新聞のニュースになり社会の表面に浮かび出てくる事件などほんの氷山の一角にしか過ぎない。この事件の他にも新聞は例によって、「迷信の盲信を打破し」「宗教の正しい認識」が必要であると強調していた。

しかし一体迷信とは何なのか、宗教の正しい姿とは何なのかはつきりした解答はないのである。人間は強そうな顔をしているけれど、一人一人切り離してみると不安定で弱い存在である。天変地異を恐れ、人災を恐れひたすら自分や家族の者に災害の及ばぬことを願っている。

しかしどれだけ人が恐れて避けようと願っても、台風、地震、火災、交通事故等は身のまわりにやって来る。それを守ってくれるのは、自分以外の超人的な力、神秘の力よりほかないと信じている。苦しい時の神だのみとはよく言ったものである。こうした人間のもつ本質的な弱さを基盤としているのが、現在の庶民の中に深く根ざした土着信仰なのである。

信仰をすれば幸せになれるというのは、人々のもつ願望にしか過ぎない。誤った信仰の姿が、とんでもない災いの源になるといえるのは、先の「祈祷師事件」が証明しているところである。こうした事件を見聞きするたびに、土着信仰に対する正しい認識をもって欲しいといつも願っている。そうでないと、単なる盲信者と、裏返しの土着信仰に無理解な者のみ生み出してしまふ結果になってしまふからである。

私から見ていると土着信仰本来の姿や意味は殆ど忘れられてしまっている。現在の庶民信仰は、

古来よりの土着信仰の歪められた姿だと言ってしまうかえはない。しかし歪められたと言っても、この信仰はなかなか根強いのである。夏ともなれば東北の果て、恐山のイタコの口寄せを信じて人々は集まってくるし、大阪谷町の楠の古木は依然健在である(※平成31年4月号『とおやまと』本シリーズの六を参照)。

## 自然と霊人と人間と

アジア大陸の宗教や思想や物質文明が、日本の地に渡来しなかった頃の我々の祖先達は、日常の中でカミ(自然神と人格霊及び動物霊を含む)と共に暮らしているという信仰を強くもっていた。勿論この時代の人々には、鳥獣が本能的に受ける感応のようなものがそれぞれ備わっていたと思う。人間の場合はそれを霊感とか言っているに過ぎない。

古代の人々はカミと共に暮らしているという実感を強くもっていたから、集団の政治、個人の生活まですべてが神事であった。天地自然の中から来る大宇宙の無限大なる知恵を、その人の能力に応じて汲み取り、その動きには無条件に従っていた。これが古代人の神ながらの信仰である。

山、水、岩、石、木等にはそれぞれの生命体(氣)があり、それをそのままにカミとして崇めた。「神」と言うと、日本には何か人と切り離れた響きがあるので、私はむしろ「加美」、若しくは「カミ」という文字を使っている。現在各地になお残っている神奈備山などは、そうした古代人の崇拜の目標だったのである。

一方、姿なき人間、動物も日本人の習慣として神と呼びならわしてきたが、これは自然神と異なり、共に生活しているという気持ちであった。こ

うした姿なき人間や動物達と、自然神との混同を避けるため、私はそれぞれ人格霊、動物霊と呼んでいる。

古代の人達には現実の動きの中に、姿なき人々(先祖)達と共に動いているという気持ちがあり、常に一体として生活していたのである。氏上(神)は、その家(氏)の先祖霊のことであり子孫と共に生活しているという気持ちだったから、鎮守の杜を作って先祖霊の住居とした。こうした目に見えぬ先祖達と共に生活しているという気持ちがあると、こちらから頼まなくとも自然に動いて助けられる。

これは現在でも全く同じことなのである。人格霊や動物霊は、現実の生活から切り離し崇める、相対的な対象に置くべきものではない。丁度車の両輪のごとく頭界、幽界、一体になって動いてこそ、意識しない働きが出て来るものなのである。これがうまくいっていないと、思わぬことが起こってくる。

よく私のところに、「どうしても病気が治らない」「家の中がゴタゴタするのは何故か」と言ってきた訪ねて来る人がある。私から見ると大抵の場合、その人の先祖霊か、住居に係る動物霊等が出て来る。こういう霊体があって、共に生活しているという気持ちがないと、時として所在を訴えるために病気にしたり家をかき回したりする。

これらは悪意でやるのではない。私がそうした霊体を鎮めて、その家の人に仲良く生活するよう教えるのであるが、そうなるように守るようになるから面白いものだ。

現在の庶民信仰の大半は、ある程度、人格霊や動物霊の所在を知らながら、本当のことが理解できていない。こういうことは霊感者や霊能者、お代さんと称する人達の人格、教養、潜在意識、霊



能力と大いに関係がある。何でも構わぬから当てて欲しい、先祖のことを聞きたいなどとそれだけにとらわれている信者は、私から言わせると、本当の宝物をつかむことのできぬ可哀想な人なのである。目先のことだけに走る信仰は邪道である。

### 自己霊が自分を救う

古代人は、自分が大祖神より分けいただいた御魂(自己霊)の顕れであるというのをよく知っていた。だから自分とつての神は、自らの御魂であると悟っていたのである。このことを形に今も残しているのは、お社の前の鏡である。人が社前に立った時、鏡に写るのは自分自身の姿である。

古来、現実の肉体をもった人間のことを影身とか現身(うつしみ・うつせみ)とか呼んできた。これなど靈魂の世界が本当の世界であるということの意味する言葉である。鏡の前に立つと、人は誰でも影身を見ることが出来る。このカゲミが詛つて鏡になった。お社の前に鏡を置いた意味は深重である。

『古事記』の天岩戸びらぎの時にも、天孫降臨の際の天照大神の御神勅の中にも鏡は出てくる。いかに古代人が鏡を祭祀物として崇めたかが分かる。これなどすべて、自分の神が自己本霊であるということを知っていたからである。この自己本霊のおもむくままに動くことこそ神ながらなのである。

古代では現在のように自分以外の力、超人間的な神にすがりつくようなことはなかった。自分の御魂が自分の依るべき神であることを忘れてから、相対的に切り離れた神が現われたのである。現代人が、自分の依るべきが自己本霊であると悟

れないのは、**枉罪**が余りにも覆い過ぎるからである。

どんな人でも生きていて正常な意識をもつ限り、自分の肉体に生命体(気)が働いていることを感じている。しかしそれをもっとはつきりした形でとらえることができないのは、物欲をはじめとする諸々の欲で悩み、苦しむという枉罪をもつからである。

### みそぎと知恵

こうした枉罪を祓い清め、神の稜威をいただくのが古代の「みそぎ」なのである。古代人は神聖な山のふもとや川原等でみそぎをして枉罪を祓っていた。

戦前、政府のお声がかかりのもとに全国で水かぶりみそぎを行っていた。古代人のやっていたみそぎは、自己本霊と現在意識を一体にするところにあつたから、ただ川原で水をかぶつてできることではない。古代人を見てみると、水をかぶるのはみそぎの後である。本末転倒とは正しくこのことである。

自己本霊と、現在意識との食い違いが甚だしいとよく靈動を起こす。私のまわりに来るとこういう人が多い。自己本霊と現在意識とが一体になつてくると、その人の能力、命に依つて大宇宙の知恵を汲み取ることが出来る。

そうなるかわざわざ求めなくても、必要な時に必要なことが、心にインスピレーションとして湧いてくる。自分より外の超人間的な力にすがらなくても自分でつかめるようになっていく。

多くの宗教と呼ばれるものは、本尊を自分から切り離して考えているようであるが、本尊を言うならば、神ながらの本尊は各々の生命体にあつて、

形を作り出し、本能や知恵を与え、それぞれの相互関係を生み出す等々、すべての現象界を司っているのである。

これまで私が庶民の中に深く根ざした土着信仰を書いてきたのは、正しい日本の土着信仰の姿を知つて、日常の生活に活かして欲しいという気持ちからであつた。宗教は生活の中にあらねばならない。生活と切り離れた宗教は口頭禅、趣味にしか過ぎない。これまで書いてきた文章の底に秘めたものを、心の眼で読み取つて、現実の生活の場で活かしてもらうことが私の本意である。

宗教の究極の目的はみんな仲良くするところにある。日本民族の魂、土着信仰がそれぞれの生活の場で活かされることを祈つて稿を置く。(完)

### 訃報

佐渡の民宿「桃華園」から「平田弘之逝去のお知らせ」のメールが届きました。えっ!? 「父 平田弘之は、かねてより病氣療養中のところ、令和2年5月29日、享年66歳にて永眠いたしました」と。メールの発信者は、緑夫人との間の二女三男の長男の太一さんでしたが、喪主は末っ子の太圭龍さんでした。

平成3年6月24日~30日  
法主様の佐渡への旅



▲ 6月26日、根本寺戒壇塚(白蓮の草庵跡)にて。左から(後列) 青山日元さん、法主様・平田太一くん、かあさん、見田暎子さん、(前列) 平田緑・弘之さん、土井里江子さん、高橋良美さん  
(撮影者:大滝哲也さん)

## 私の家の歴史 民衆書房——祖父の遺稿から

神奈川県横須賀市 金田綾子

私の実家は古本屋でした。子ども時代を過ごしたのは東京都羽村市、玉川上水のある川と丘陵の町でした。実家はこの羽村にある町の古本屋でしたが、2005年に倉庫を横須賀へ移転、この時にはすでにネットだけの本屋になっていました。成長し続けた出版業界が縮小し始め、ブックオフ（新古書店）、オンライン書店が出現し、本の世界も様変わりしていました。その中で生き延びることができない本屋は消えていく、そんな時代です。私の実家も昨年、細々続いていたネット販売を止めて片付け始めているところでした。

店の名前は「民衆書房」。現在、新たにお店を作るとして、「民衆書房」なんて名前は生まれないうらなあと、いつも思っていました。そんな折、「家の歴史」というテーマで原稿を依頼されたのでした。私はこのタイミングで「民衆書房」について文章にしてみることにしました。

\*

今では使うことのない、この時代を感じさせる名前を考えたのは、私の母方の祖父、倉間勝義でした。このことを振り返るに当たって、大学在学中にまとめた冊子「倉間勝義 遺稿」（写真上）を改めて手に取ってみました。これは、当時大学でライフヒストリー研究会（横浜市立大学 加藤ゼミ）に出席していた時に、祖父の原稿（小説の形で、祖父が自分史を書いたもので26歳までの未完のもの）の存在を知り、私が書き起こしたものです。書き起こしたあとに、祖父が生まれた島へ行く機会を得て、その時の写真などの資料も含め、この冊子を作りました。

祖父は、明治41年（1908年）に瀬戸内海の

上島諸島にある佐島という小さな島で生まれました。愛媛県越智郡弓削町という住所になります。弓削町は弓削島、佐島、豊島、百貫島からなっており、現在人が住んでいるのは弓削島と佐島のみです。2000年時点で佐島の人口は667人でした。

読み返してみると、細かな描写がある一方、文字不明の部分や整合性のない文章があり、どこまでが事実なのか定かではありません。しかし、「文章にあったとおり島に神社や寺があったことは感動的でした。」と当時、島へ行った時の気持ち私を記しています。祖父の生まれ故郷の記憶は2000年を超えた今も変わっていないのです。案外、祖父の記憶にあったこの細かい話は本当のことなのではないかと思っています。

「遺稿」によると、祖父は5歳の時に大病にかかっています。病名は不明で、いろいろな医師を巡ったにも拘わらず、とうとう医者が悪を投げる状態にまでなってしまいました。絶望的と思われたのを救ったのが天理教との出会いでした。祖父の母（スエ）は、「彙でも掴みたい思いであったからぐったりと寝ている壮吉（祖父）を背負って——その頃は島には人力車も自動車もない時代一里強を、夢中であるいて天理教田熊宣教師の門を叩いたのである。」（「遺稿」より）

そこでのようなことがあったのかはわかりませんが、その帰路に口も利けないほどに弱っていた祖父は歩けるほどまでに回復してしまいます。この出来事がきっかけとなり、祖父の母（スエ）は天理教に深い関わりを持つ生き方を選ぶことになりました。



九死に一生を得た祖父はその後、島を出て丁稚奉公をし、神戸、大阪、そして東京へと生活の場所を移していきます。そして、島に戻ることはありませんでした。貧乏な祖父にとって、お金を稼ぐことはとても重要なことでした。生活では実にいろんなものを売っていたことが記されています。例えば、納豆、レモンの素、葉、中国織物などです。

初めにも書きましたが、冊子には26歳（昭和8年、1933年）までのことしか書いてありません。祖父が亡くなったのは88歳（平成8年、1996年）なので、人生の半分以上携わった「本」の仕事については、ここには残念ながら記されていません。当然、「民衆書房」という名前も出てきません。しかし、いくつかの資料を読んでみると、恐らく24〜27歳ぐらいの間（昭和7年〜昭和10年、1932年〜1935年）、結婚して早稲田に通う苦学生の頃に、東京の三河島で自分の本や親友の処分する本を集めて本を売る仕事を始めていたようです。これが「民衆書房」の始まりだったのではないかと思われます。

改めて「本」という視点でこの「遺稿」の中から気になるエピソードを拾い上げてみました。小学生時代、「少しでもひまがあれば読むのは土生から買ってきた立川文庫だ。」とあるように、祖父にとっては小さい頃から本は大切なものだったようです。一時天理の別科で過ごした時にも、時

間があると本に没頭していたようです。「宗教の本質」「資本主義社会」「社会主義」「共産主義」「無政府主義社会」「人は何をすべきか」、読むに従って自分にはわからないことがたくさんあるというところに気づき、大学に行きたいという思いを強くしたのでした。文学の世界に憧れたようですが、文学では生計をたてるのは難しいという理由から経済を学びます。大学時代は友だち同士で文芸雑誌を作り、様々な勉強を自分たちでしていました。「教科書は1カ年分を一科目一週間で読破すること。週1回の各自読んだ本の中から一冊選んで批評会を実施する。東北が大飢饉だとの報道でなければしの銭をはたいて岩手県まで視察に行った。」などの記述が見られます。

なんとなくですが、学問への希望をもち、また日本社会を批判的に見る生き方として、祖父が本に携わる仕事をするようになったのは自然な流れであったように感じます。

＊

これまで、祖母については触れてきませんでした。本を売る商売を始めた頃に、一緒に生活していたのは祖母、倉間みなでした。旧姓は原島、家が漢方薬の商売をしており、そこでアルバイトのように仕事をするようになったのが、祖父でした。みなの家は母方がやはり天理教とつながりの深い家系だったようです。みなは東京の文京区の小石川で生まれ、5年生の時に、弟とともに、天理教下谷分教会の始祖である叔母、輪島アサのところへ修行に行っています。高級軍人の社交場である、偕行社というところで、神子(巫女)を務めていたそうです。骨が細く、身体が弱かったそうですが、98歳まで生き、天寿をまっとうしました。大正後半から昭和の初め、そして第二次世界大戦が終わるまでは日本は激動の時代でした。この

時期の日本について、歴史を語るほどの知識が私にはありませんが、日々暮らしていくのに精いっぱいだったのではないかと想像します。太平洋戦争中は一家で千葉県我孫子や長野へ疎開もしていました。

＊

本の仕事が本格的になるのは戦後です。『本屋図鑑』(2013年 夏葉社)によれば、「1945年8月に太平洋戦争が終結すると、それまでの戦時下の制約のもとに縮小を余儀なくされていた出版・書店文化が、さまざまなかたちで動き始めた。」「終戦直後しばらくは、活字に飢えた消費者のニーズに、制作・流通面が追いつかない状況が続いた。47年に岩波書店が『西田幾多郎全集』を刊行した時は、お客さんが書店に徹夜の行列をつくって本を求めると、新刊書が現在では考えられないような売れ方を見せることもあった。

出版社、取次、小売書店という本の流れの基本的な仕組みも、この時期に少しずつ確立されていった。」とあります。こうした日本の出版文化の繁栄の中で祖父も本の商売を続けてきたのでしょう。

祖父は本の取次、特価本、出版、教科書販売、日本特価書籍株式会社の立ち上げなど、たくさんの仕事を手掛けます。しかし「八転び八起き」と私の母が祖父の人生を形容しているように、失敗も多く家族は大変だったようです。武蔵境、吉祥寺、浅草など住まいを転々としていました。最終的にはもう今はありませんが、祖父の子どもたち4人のうち3人がそれぞれ「民衆書房」(東京都羽村)・「三多摩図書」(東京都国分寺)・「亜細亜書房」(東京都武蔵野)というお店を営むようになりました。

今回「遺稿」を読み返してみても「後年壮吉が多摩一円の郷土の歴史を出版するに至るが、神様もそこまでは見通していなかっただろう。」という文章を発見しました。これは事実で、武蔵野郷土史刊行会という名で『多摩の歴史(全8巻)』『まいまい井戸』『多摩の歴史に残る800人』など多摩に関わる本を30冊余り出版しました。多摩に移り住んだ時より、郷土史に興味を持ってこれらの本を出版したそうです。郷土史家ではありませんでしたが、何か惹かれるものがあつたようです。倉庫の片付けをしながら、このうちの何冊かを見つければ、開いてみました。

『多摩の歴史1』(写真下/昭和51年、1976年 武蔵野郷土史刊行会・有峰書店 共同発行)この本の発行は祖父、倉間勝義が68歳の時です。監修は国学院大学の大場磐雄さんです。考古学者の方だそうです。最初に大場先生の「多摩に住む父母の方々に」という文章があります。

「このごろの若い人たちは、目先のことばかりに気をとられて、自分を忘れたまたは日本国をも忘れているといわれています。困ったことです。何故でしょうか。私は肝心の自分の足もとを見ているからだと思います。私はまず自分の足もとを見ることが、自分を知り日本を知る最初のことだと思えます。」と書かれています。

### 自分の「足もと」を見ること

この文章の中で、「自分の足もとを見ていない」という言葉にどきりとしました。「足もと」とはなんのでしょうか。この本は多摩の歴史についての本なので、住んでいる土地の歴史のことかもしれません。

しかし、私はもう少しいろいろなことを想像してしまいます。自分の家族のこと、あるいは自分



表紙写真によせて

福島県南相馬市 高橋 良美

前略

ご無沙汰です。コロナ騒ぎも少し落ち着きそうな様子でしょうか。

4月30日、福島市の隣の伊達市の霊山りょうざんという山に登ってまいりました。この山は、平安初期の貞観元年(859年)、慈覚大師によって開山されたと言われ、釈迦が修行したという霊鷲山りょうじゆざんに因み、霊山と命名されたとのこと(それ以前は不忘山と言われていた)。山号を南岳山山王院「霊山寺」と称し、往時は三千数百宇の伽藍を誇り、別名北の比叡山とも言われたそうです。

南北朝時代になり、後醍醐天皇の命を受けて北畠親房・顕家・顕信親子等が多賀城(仙台市)で奥州を治めたのだが、多賀城陥落後はここに国府を開いたという場所です(1337~1347年)。

最後は北朝方との激しい戦いの舞台となり、城は炎上、霊山寺の堂宇もことごとく焼失しました。現在は山頂に霊山城跡の広場があり、いくつかの石碑が立ち、拝所と案内板があります。ここで法主さんにお繋ぎし、お供えもして、亡くなられた両方の方々の慰霊をさせていただきます、下山しました。

駐車場に着くと、ちょうど林修三さんから電話があり、話の流れから、霊山の写真を『おおよまと』の編集部に送ってくれたらどうかと言われ、送らせていただくことになりました。

白虎隊士の墓へ

また、今から約10年程前になりますが私達(高橋・見田)に、杉本さんが「いつか会津の白虎隊

の慰霊に飯盛山へ寄って下さい」と言われたのですが、なかなかその機会が訪れず、やっと今回、会津を通る機会があり、飯盛山への道標が目に入り、5月1日に寄せていただくことになり、お参りをして法王様にお繋ぎ致しました。

白虎隊は、慶応4年3月10日に編成され、土中・寄合・足輕の各隊があり、写真の墓は、同年8月23日、ここ飯盛山で自刃した土中白虎隊二番隊19名の墓です。隊士の遺骸は、西軍により手を付けることを禁じられていましたが、村人により秘かに近くの妙国寺に運ばれ仮埋葬され、後にこの地に改葬されました。

現在の形に整備されたのは明治23年で、この墓の右側には、白虎隊所属に関係なく領内をはじめ京都・新潟・栃木などで戦い、戦死した14~17歳の少年武士62名の慰霊碑があります。白虎隊の仲間達として平成13年に建てられました。

会津藩の悲惨は極まったが、戊辰戦争で攻撃側の西軍もまた多くの血を流さなければなりません。遠く故郷を離れて会津若松付近で戦死した、十余藩174名の将兵の霊の眠る西軍墓地にもお参りさせていただきます。きましました。



奈母太加天腹  
奈母太加天腹  
奈母太加天腹  
拍手合掌

▼付け足して

永仮 まゆり

コロナ禍のステイホームで読書需要が増え、SNSでは自分の好きな一冊や、お薦めの一冊を紹介するリレー書評なども流行っているようだ。

山口百恵の「横須賀ストーリー」が流れる京浜急行横須賀駅から少し歩いた場所に、「民衆書房」の書庫がある。新書を扱う本屋では決してお目にかかれないタイトルや風貌の本たちに出会う。古本好きには何ともたまらない世界だ。

いみじくも金田さんの文章のなかに「自分の足もとを見る」とあったが、そのためには古い書籍や原典に当たることが大切だ。古本への愛着はそういう思いに通じるものがある。

家の歴史をたどることは、自分の足もとを見ることでもあり、相互理解の助けになるに違いない。多色彩の一大事の因縁が『おおよまと』紙で展開されるのも、味の世界ではないだろうか。

# あじさい日誌

5月12日 瑞光院に雨漏りがあつて、この日、午前8時から屋根の補修工事が始まりました。

屋根瓦は大変品質が良いもので、60年近くなのに1枚もいんでいなくなつたと専門家が驚かれたとのことでした。

5月15日 大倭神宮月次祭。  
5月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は昭和37年5月23日の法話をお聞きしました。(平成18年『とおやまと』5月号に「神ながらの道―基礎的理解のために」として掲載分)

5月29日 大倭会会員の平田弘之さんが急逝されました。4頁の訃報をご覧下さい。

6月1日 休止していた「あじさいの箱」のサークル活動の習字と真向法が再開。手まりや押絵も順次、続きます。

6月6日 大倭神宮月次祭。  
午後6時半から大倭会館で倭の会が開かれました。

6月10日 近畿地方は梅雨入り。東方碑の周りのあじさいが色鮮やかです。

大倭安宿苑では

6月1日 先月は大勢のため各施設で辞令交付を行いました。が、今月は会議室で理事長より、座席の間隔をとって4名の辞令交付。この月の良いスタートを切ることができました。

(菅原園)  
5月25日 食べやすく一口サイズにして、アメリカカンドッグとバナナフリッター作り。

(須加宮寮)  
5月21日 須加宮寮単独で防災避難訓練を行いました。

(長曾根寮)  
5月18日 (デイ) 作品作り。カタツムリやカエル・傘等を丁寧に折り紙しました。

5月21日 (特養) 誕生会。コロナの影響で「喫茶クラブあじさい」が中止で個別レクリエーションを実施。日付の唱和・今日は何の日・リハビリり全身体操・クイズ等のゲームをしました。

(茂毛路園)  
6月4日 しばらく中止していた「ピアノでうたおう」開催。

## あんない

\*月次祭(大倭神宮)  
7月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

\*大倭会主催第618回祝会  
7月12日(日) 中止とします。

※8月の祝会は例年通り大掃除祝いです。8月9日(日)でどうぞよろしくお願ひ致します。

\*月次祭(大倭神宮)  
7月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

\*月次祭(大本宮)  
7月23日(祝) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

参加人数をグループ分けし、手指消毒、座席の間隔をあけて、久しぶりに声を出すので発声練習から始めました。

(八重垣園)  
5月10日 クラブ活動の中止が続いています。気温が上がるようになって、居室の換気を促す声掛けに留意しています。

こたまとこたまと  
ガイアみなまた 高倉 敦子  
ステイホームが身に付くと空気がきれいになるような気がしています。我が家には旅する蝶、アサギマダラがひらひらとやっ

て来て、それも毎日そのきれいな姿を見せてくれました。連休中、どこにも行かず心静かに過ごしたご褒美のようです。(写真はアサギマダラ、ネットから)



## 東光大祭 祭典のご案内

令和2年9月2日(水曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津齋庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わる次第、拝殿に教長さんをお迎えして

東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭のあいだ拝殿では法主様の東光大祭のご法話や紫陽花色の記録映像等を聞いたり見たりしていただきます。

【注意】 祖霊祭の経木への書き込み受付は

8月10日までとさせていただきます。

## 編集後記

▼平田弘之さんの訃報に驚かれた方も多いと思います。

平田さんは若い頃に共同体巡りをしている、石垣雅設さんとの出会いがあり、野草社が紫陽花色に移ったのに同調して、昭和59年東京から奈良市佐紀新町に一家で移住。失業保険がきれて大倭安宿苑で仕事をすることになり菅原園で約6年間、私の同僚でした。

法主さんに「お前の家には順徳さんが出てくるわ」と言われ、神棚には「順徳院大善神」という人格霊をお祀りしていたそうです。そこへ母の故郷である左渡で事業をやらないかと誘われ、平成2年36歳の時、民宿「桃華園」を開業。

平成6年1月号『とおやまと』の「大倭50年を迎えて」私とおおやまと」というアンケートに原稿をよせてくれました。それについて1月の月次祭で法主さんは、《涙出ました。：略：ここに書いておる十人の方が、これだけ喜んでくれる、これを見たときに、私はもういつでもこの世の中から消えたかて自分のお役目は済んだなど：略：》(『ながそねの息吹』所収)と話しておられます。

「現身はよし朽つとも永久に結ぶ心のかわるものかは」(春)